

共に生き、共に喜びを得るために

高橋修さんインタビュー

聞き手 吉川左紀子 (こころの未来研究センター長)
Sakiko YOSHIKAWA

鎌田東二 (こころの未来研究センター教授)
Thoji KAMATA

内田由紀子 (こころの未来研究センター准教授)
Yukiko UCHIDA



高橋修 (たかはし おさむ) 1930年、京都府物部村(現在の京都府綾部市)に生まれる。1951年、京都府立農業講習所卒業。1952年、京都府に採用され農業改良普及事業に従事。1988年、京都府を退職。1990年から2001年まで、国際協力機構(JICA)の専門家として、また全国農業改良普及支援協会の委嘱により、アジア8カ国の農業普及改善について技術協力。2002年から2008年、ペシャワール会医療サービス(PMS)の農業計画担当として、アフガニスタンで現地指導と後方支援に従事。編著に「アフガン農業支援奮闘記」(石風社)がある。



左から、吉川左紀子センター長、鎌田東二教授、内田由紀子准教授（撮影：坂井保夫、p2、p11下の写真も）

まず現地に学ぶ

吉川 高橋さんは農業普及のお仕事でアジアの各国で活動してこられたわけですが、行く土地土地によって、気候も土も違いますし、農業もみんな違いますね。行った先でいろいろやり取りをしながら進めていらっしゃるんですか。

高橋 私は1952年から1988年まで京都府の農業改良普及員(2004年に法改正で呼称を「普及指導員」と変更。本文中ではすべて「普及員」と記述)として普及活動に従事し、1990年から、国際協力機構(JICA)や全国農業改良普及支援協会、ペシャワール会医療サービス(PMS)の仕事で、アジア数カ国において農業改良の技術協力を携わってきました。

ご承知のとおり、農業は自然条件に大きく影響されます。また農業形態も、作物の選択も、作り方も、それぞれの国の文化に即して営まれています。食べ方についても同様です。日本から作物を持ってきて、日本の技術そのままでもやろうとしてもまずうまくいかないし、心から受け入れてもらえません。お金を出せば分かったような顔をしてやっていますが、ほとんど根づかない。どんな国でも農家は、経験の中でいろいろ工夫してきたことに誇りをもっているのです。

私が仕事をしていたインドネシアのジャワ島のチャンジュール近くにある、標高1,000メートル余りの高原は、ジャカルタ向け野菜の一大産地ですが、野菜が植えてある畝のところどころに、ニンニクかタマネギか、そういう類いの野菜が植えてあるんです。何だろうと思って聞いてみると、瓜類などの根に寄生するネマトーダという害虫がいるんですが、これが植えてあると

その臭いで、そこから2メートルぐらいはネマトーダがいないと言う。それは経験から生まれた知恵なんですね。

アフガニスタンでも独特の技術があり、パキスタンからトウモロコシのいい品種を持ってくると、まず害虫にやられる。日本から持っていったものも、もちろんやられる。彼らは、長年そこでつくっているトウモロコシの中から、強そうなを選んでつくっているのです。そのかわり味が悪く収量も低いですが。

通常なら日本から、つくりやすく、たくさん穫れる種苗を持っていきます。しかし、それをやると失敗する場合がありますから、最初は彼らがやっている選抜作業を少し手助けし、そこから少しずつ新しい品種を組上に載せていく、といったふうにするのです。

内田 現地の人が持っている技を理解してそれを吸収しながら、高橋さんのほうからも何か伝えるということなんですね。

高橋 まず最初に彼らの経験を尊重しないと信頼してくれません。高飛車に出ると「初めて日本から来て、何を言うとするんや」と鼻先であしらわれます。

アフガンへは2002年に私が出かけ、その後6年半の間に、五月雨式に4名の青年が農業計画の活動に参加してくれました。このうち、橋本康範君は元小学校の教員、進藤陽一郎君は某国立大学の哲学科卒など、ユニークな青年ばかりでした。

中には、日本で齧ってきたことをパッとやろうとしてガツンとやられる例もありましたが、みんな私の「まず現地の農家がやっていることをよく見て……」という助言を聞き入れ、真面目に向き合ってくれたと思っています。

鎌田 まずこちらのほうが学ぶ姿勢で、現地を観察し



アフガニスタンのカライシャヒ試験農場 左から小学校教員を退職して参加した橋本康範君、「助けたい」という強い思いを持って参加した伊藤和也君、試験農場担当農家のモハマドさん



麦刈り ペシャワール会農業計画の活動地域は小麦の原産地と目される地域にあり、小麦は主食用の重要作物として多様な品種が栽培されている

ないといけないんですね。

吉川 高橋さんのご本（『アフガン農業支援奮闘記』）に、アフガンで亡くなられた伊藤和也さんが現地の方にとっても好かれて信頼されていた、というお話が書かれていました。

高橋 彼は非農家の出身ですが、静岡県立農業短期大学を出て、静岡にありますがアフガン支援のNGO「カレズの会」の縁で、直接「ペシャワール会」の現地活動をやってみたいということで来たわけです。

彼は最初、「教えてやる」という意識が強すぎたためになかなか村に受け入れられなくて、ほかのNGOに変わりたいと相談がありました。そこで私は言いました。「君は、希望を持ってここまで来て、なんでうまくいかないのか分かるか？ 農家の人は、ここで生まれ育って、百姓を長年やってきた。君よりずっとベテランなんだ。そこを大事にしないと、いろいろ言っただけ聞いてくれないよ。よそのNGOへ行っただけ同じこと。もう1回やり直せ」と。

またあるときは、伊藤君から「日本の小麦の品種を持ってきたい」と提案がありました。私は、提案は嬉しかったですが、「いや、待てよ」と思ってね。現地でものすごく立派な小麦をつくっている農家をちょいちょい見ていましたので、伊藤君に、「あそこの角っこの畑の小麦は、ものすごくよくできておるな。こっちの川の横のも、よくできているだろう。なぜうまくいっているのか確かめることが先ではないか」と助言しました。

さっそく彼はそれらの農家をまわりました。彼が集めてくれたノウハウは、種を早く蒔くことと、薄く蒔くことでした。それから平地にばら蒔きするのではなくて、ちょっと畝立てして蒔く。そういうノウハウを5つほど集めてきてくれました。それを1つの体系にして試験農場でやったところ、10アールあたり慣行の

倍近い470数キログラム穫れました。大変な評判になり、地域の人が大勢見学に来たようです。

そのとき伊藤君は、これはあの農家から早蒔きのノウハウをもらって、薄蒔きのノウハウはこの農家からもらったと言って、農家の名前を挙げて見学に来た人に説明したところ、それがパツと広がって、あれだけ慕われる存在になったのです。

伊藤 君は最初、自分の考え方をを変えることは苦しかったらうと思います。教えてやるつもりで来ているのに言うことを聞いてくれない。そこで、伊藤君は自分の考え方を変えていった。教育用語で「概念砕き」というそうですが、それを彼は実践した。彼は人柄がいいとか、立派な仕事をしたとか、それで評価するのもいいけれど、彼にはこういう苦しい経過がある。そこを乗り越えたことをもっと評価してやってほしいと思っています。

情報よりもコミュニケーション

鎌田 最初、伊藤さんは日本である方法を学んで、現地でそれをそのまま伝えようとしたがうまくいかない。そこで、現地から学んで現地の方法論を取り入れ、それを組み立てて、体系化し直して提示したところうまくいった。そのとき、これとこれを組み合わせたらいいのではないかと、考えを再構築していくときの理論的裏づけが必要だと思うんです。この理論と実践、実際の方法を、どういうふうにつなげていくのですか。

高橋 農業は、技術的に「これが正しい」と分かっているけど、地域とか品種が異なるとか、またその年の天候によって、そのまま適用できない場合が多いですね。アフガンの麦の播種期を例にとると、ふつう農家は12月上旬に播種しますが、中には11月20日頃に蒔いて成績を上げている農家がある。その何軒かの中のより優



番茶を干す高橋さんと伊藤君 アフガンでは緑茶が愛飲されており、すべて輸入に頼っている。そこで人間関係を温める一助にと、高温とアルカリ土壌に苦勞しながらお茶の栽培を始めた



長老たちとの話し合い ペシャワール会農業計画の活動目的は、自立を促し、自立するための活動を援けることにある。課題の選定はその出発点で、十数カ所で半年余り、辛抱強く地域の長老たちと話し合いを重ねた

れた農家の播種期を確かめ、播種適期はだいたいこのへんかと見当を付けます。

鎌田 すべて経験と観察から割り出していく。

高橋 簡単に言えば、経験と観察をベースに置き、その上に学理と試験成績を重ね合わせ、農家が納得する改善策を相談していくということでしょうか。

内田 そういった経験と勘みたいなのを生かしてうまく情報を収集できるというのは、普及員さんのプロフェッショナルな役割なのですか。

高橋 そうだと思います。今の普及員さんは、すぐにインターネットで検索したマニュアルを使うことが多いと聞いています。インターネットも大いに使ったらいのですが、でも、インターネットでデータだけ取って使うのと、直接農家に会い、細かいところを教えてくださいながら使うのとは全然違います。

そのノウハウを提供してくれる農家も、煩わしそうな顔をしています。聞いてもらうのはうれしいことなんです。インターネットですと農家は、「いろいろ苦勞したんやね」とか「ずいぶん工夫しているね」とか、そういう声を聞くことはできないでしょう。

普及員はやはり、直接農家の声と実情に触れながらノウハウを会得する。そして、「こういうことに使わせてほしいんだけど、どうだろう」と投げかけもする。そうすると、「うん、俺のところも100点満点ではないから、こういうことも気をつけるように言ってもらったらどうだ」といったアドバイスをくれるんです。

内田 そういうやり取りは、農家さん自身の誇りややりがいにつながるわけですね。

鎌田 お話を伺っていて、高橋さんのお仕事と、私がやっているフィールドワーク的な研究と、似ているところがあると思いました。確かに、情報だけだと、イ

ンターネットのほうが速いし、あるいは本からその部分だけを取り出せばいい。だけど、実際のフィールドワークで一番大事なものは、情報よりもコミュニケーションで、そこにいる人たちと信頼関係を結ぶことができるかどうかですね。

そうすると、今まで得た情報とは違うような話が出てくる。そういう信頼感は、本当に深いコミュニケーションができません。情報だけを聞き取ろうという姿勢で行くと、大事なことは教えてくれなかったりする。本当にリラックスして打ち解けて親しくなると、いろんな機会にぼつぼつと出てくる。こういうことは、待つというか、そういうふうなことなしに生きたものが現れてこない。フィールドワークを通してそういう経験をするんですが、いまのお話は、コミュニケーションの大事さとか、そのもっと奥底にある、人間どうしの基本的な信頼感のようなものが土台を成しているということを教えられたように思います。

高橋 農家は頑固ですからね。農家だけではない。経験の必要な仕事の人はいがい頑固です。

鎌田 職人さんも、自分の流儀がある。

高橋 そういふ農家に行って、「これをやってみろ」「分かった。やってみる」というのは、あまり長続きしないのが多いんです。そうではなくて、「おまえ、何を言うてんのや」というような、少々の働きかけでは動じない人は、やり出したら素晴らしい仕事をする。どうやってそういう農家を立ち上がらせるか、その動機づけですね。そこは、やはり教科書どおりではいかないところがあります。

私の場合はほめることが多いです。いろいろ話を聞かせてもらっていると、過去の苦勞を話されます。そ



グループ員集会和栽培状況 スリランカのヤシ園の中で野菜やパイナップル、バナナなどの産地づくりを進める。左はあるグループ員集会で、立ち上がって経験を披露しながら積極的に提案してくれる農家

うすると、私も百姓の生まれですから、身につまされたり同感するところが多いのです。そこから始まって、ささやかなことでも「素晴らしいアイデアやな」とちょっと漏らすと、「ああ、そうか」と喜んでくれる。苦勞したり、工夫してきたことを評価されると、さらに頑張ってみようという気になる。そのへんが普及員の仕事冥利に尽きるという感じですね。

内田 農業者さんと、まさに心が通じた瞬間とは、そういうときに訪れるんですね。

高橋 そうですね。スリランカでこんなことがありました。ヤシ園は50年過ぎますと、急速に生産性が下がってきます。そのヤシの木の間に、バナナとか、パイナップル、野菜などの産地をつくっていこうというプロジェクトでした。それも直接やるんじゃなくて、普及員の活動の改善を通じてやる。そこがなかなかしんどかったのですが。

担当の普及員さんと、カウンターパートと、私とが現地に行って、事前の打ち合わせに従っていろいろ話をしました。そうしたら、農家の人がシンハリ語で何か言っている。「何を言ってるんだ?」と聞くと、「気持ちにはわかった。わしらなりにやってみるよ」と言っていますよ。「おお、そうか」と思って。いろいろやっていると、やはり気持ちが通じ合うときがあるんです。

内田 逆に、すごく大変だったり、簡単に気持ちが通じなかったり、というようなこともあったでしょうね。

高橋 ありました。この場合も、ここまでいくのにかなりの月数を費やしています。その間じっと我慢をして、ここの農家は、今日はどんな仕事をしているのかと見て回っているわけです。そのうち「また来よったんか」とヤシの木に登って実を落として、ジュースを飲ませてくれたりする。そんなことを何回か繰り返しながら、いよいよこのへんでやってみるかと思って、

「いっぺん集まって相談してくれないか」と声をかけました。これ(左上)がそのグループ員集会の写真です。

この経験が生きて、アフガンでも同じような方法でやってきました。こちらが答えを出すのは簡単ですが、それをやったら根付かないと思っています。

日本人の驕り

吉川 JICAの活動ですが、日本人が行く場合と、欧米の国から行く場合で、現地の人たちは受け止め方が違うのでしょうか。日本人のほうが近しく感じてもらえるとか。日本では、欧米から人が来ると尊敬するみたいな、欧米の文化をちょっと高く見るようなところがあると思うのですが。

高橋 スリランカでは、やはりかつての宗主国のイギリスに対する尊敬みたいなものがありまして、確かに日本人をちょっと下に見るといったところがありました。でも、私はそういうことは一向に苦になりませんので、日本国内のときと同じように、同じ目線で付き合ってきました。しかし、日本人6名のメンバーの中には、「日本から持ってきた技術を教えてやるんだ」というスタンスの人が多かったですね。

スリランカの南西モンスーン地帯は、乾季にはほとんど雨が降らず猛烈に暑い。そこへ、「日本の技術だ」といって、畝を立ててキュウリを植える。当然3日も持たずに枯れてしまいます。向こうの技術は、畝を立てて植えるのではなく、溝を掘って、その溝の中を耕して、燃えるものを持ってきて溝の中で燃やして肥料にします。そして、そこへ野菜を植える。

吉川 日本と逆ですね。

高橋 「日本流ではだめだ」と言っても、専門家と称する人が「畝を立てないとだめだ」と言って……。私はチームリーダーとして苦勞しました。

鎌田 なぜそういう思い上がりみたいな意識が生まれてくるんでしょうかね。本当に経験を大事にする普及員とか農業の研究者だったら、もっと素直に物を見て、素直に学び、そこから再構築することができるはずですよ。

高橋 最近日本の国力が落ちていますが、私が外国へ行かせていただいていたところは、JICAも農水省も、イケイケドンドンで、技術移転だ、日本流のやり方を広めるんだ、という意識が非常に強い時代でした。

鎌田 ODAも日本がいちばんお金を出しているんだという経済大国の驕りがあったかもしれませんね。

高橋 そうですね。あの時ほど日本人の驕りを感じたことはなかったです。

鎌田 80年代の終わりから90年代が、そういう時期でしたでしょうか。

高橋 はい、そのころです。今思い出しても情けないです。

鎌田 日本は明治以降、韓国を併合したり、中国を侵略的に支配しようとしたりして、戦争があって、そういう歴史的経験を反省したはずですが、経済大国になったときに、また同じようなことをやっているんですね。これはお金や権力があつたり、力をつけてきた者の持つ業のようなものなんでしょうか。

高橋 心がけていても、人間というのは思い上がりしやすい本性があるんじゃないかと思ったりします。私自身、「ああ、思い上がってるな」とふと気づくことがあります。

話を聴き取り再活用するのは難しい

鎌田 普及員の仕事の「普及」という概念は、一面で、上から下へという意味合いを持っていますよね。でも、実際に現場に入ると、下から来る声をうまく循環させていくようなことができなければ、本当の意味での普及は成立しない。そうすると、その方々1人1人の声を謙虚に聴き取る、傾聴する姿勢がないと、うまくいかないですね。

高橋 普及活動というのは、私は基本的にはボトムアップの仕事じゃないかなと思っています。農業で生活してきた人は、素晴らしい知恵を持っています。無限の可能性を持っている。それを謙虚に聞き出さないと、どこかで齧ってきたことを押しつけようとしたって、信頼されない。そんなことを仲間内でしゃべっていたら、「おまえはずるい」と言われたことがあります。

鎌田 普及員仲間にはですか。なぜですか。

高橋 「わしらは、気張って本を読んで調べてやっている。おまえは何もしないで、いろんな農家の話を集め

てきて、それをつくねてやっているだけじゃないか」と言ってね。

鎌田 それは逆じゃないですか。本を読んで、それをまとめて伝えるのはやさしいけれど、話を聴き取って、それをうまく再活用するのは、本当に難しい。

内田 いろいろな知見を集めて、まとめて、いいところ、悪いところ、枝を切ったり伸ばしたりしながらやるのは、ひとつの芸術みたいな技ですね。私はそれが一番肝だと思うんです。

吉川 だいたい、農家の人たちもそんなに簡単には自分たちの大切なもののことは話さないですよ。人間誰しもそうだと思います。

内田 自分の大事な知恵はなかなか話してくれないですね。農家さんも、本当に信頼しないと話してくれないんじゃないですか。

高橋 私は小学校5年生のときから、百姓仕事の手伝いをさせられていたんです。父から、牛を使って耕してみろと言われて。田圃の端まで行ったらUターンします。牛は手綱を引っぱったら回りますが、犁は重くて回せないで、親父が回してくれるわけです。そして数歩だけ親父がやる。親父が手綱を持っている間は、牛は素直に前を向いて歩く。そっと代わっているはずなんです。私が代わると牛は1回立ち止まって後ろを見て、「ああ、こいつか」という感じで、その後はノソノソ歩いたり、草のほうへ行ったり……。

鎌田 現金ですね(笑)。

高橋 牛の話は余談ですが、親父は、「百姓ちゅうのはのう、村の中で助け合ってやとるんじゃ。ここが済んだら、あそこの家へ手伝いに行くからのう。うちだって世話になる時があるやろ」と言っていました。当時は子どもで詳しくは分かりませんが、いま思い出すと、やはり父の言うことは正しかったなと思います。またそれが、農家の本音を聞き出すときに役立ってきたように感じています。

鎌田 そういうことが血肉になって染み込んでいるので、話しているとそれが滲み出てきて、農家の方も、この人はよく話がわかる人だなとなる。こういう具体的なディテールを本当によく理解してくれるんだというのは、やはり話しているうちに分かるんでしょうね。ふつうの勉強だけしてきたら、なかなか具体的なことなんてわかりにくいですよ。でも、高橋さんのような経験を持っている普及員さんは少なくなっているんじゃないですか。

高橋 年代から見るとほぼいなくなったでしょうね。私の経験がスリランカやアフガンで通用するかどうか分かりませんでしたが、私の原体験みたいなものを生かしながらやってきました。そんな経験から「やはり農家はどこの国でもいっしょやな」と思っています。



サツマイモの収穫 アフガニスタンで、早期育苗、病害虫の予防、種芋の貯蔵など、現地でも可能な栽培方法を試行錯誤しながら、サツマイモを人気作物に育て上げた。収穫となると、村人たちがどこからか聞きつけて手伝いに集まってきた。日本でもめったにお目にかかれない立派なサツマイモを収穫。この後は楽しい焼き芋作業が待っている

吉川 お父さんが話されたことをずっと覚えていらっしやるんですね。

村人同士の互助的な関係

鎌田 農業って、水の利用もそうですが、村人同士の互助的な関係をうまくしないと、なかなかスムーズにいかないと思うんです。日本は非常に互助的な関係をうまくつくっていく。けれども、隣とはうまくいかないとか、いろいろな問題があると思うんですが、国別の違いというか、普遍的にどこでも農民はそういう互助組織をつくっているのでしょうか。

高橋 インドネシアでは、互助組織の有無についてはよく分かりませんでした。百姓はけっこう水の管理とか稲刈りを助け合っていてやっていた。それから、地主さんとの交渉も、1人では埒があかないので皆でやっていた。

アフガンの場合は、自然条件も社会的な仕組みも厳しさがあって、そうしなければ生きていけませんので、農作業だけにとどまらないで、生活も一族ごとに助け合って暮らしていました。しかし悲しいことですが、他の一族とはかなりの緊張感が生じる場合もあるように感じました。

鎌田 掟が厳しいイスラム系ですからね。

高橋 そうです。長老の言うことに逆らうと、その村に住み続けることはできないと聞いたことがあります。やはりアフガンの場合、そこは厳しいんです。

鎌田 日本の場合、農作業と祭りは切っても切れない、新嘗の祭りとか収穫感謝の祭りがありません。年の初めには豊作祈願のお祭りもあります。インドネシアとかほかのところでも、そういう祈りとか祭りとか、収穫に関してあるのでしょうか。イスラムの場合はちょっと違うかもしれませんが、特にヒンズー教とか仏教の場合、農耕と祈りとか祭りなどが関係してくると思うんです。その土地の宗教的な世界観と農作業や農業の関係はどういうものだったのでしょうか。

高橋 いちばんそれを感じたのは、スリランカの南西モンスーン地帯で雨季明けに行われる村祭りです。夏に古都キャンディの仏歯寺で行われるお祭りと同じペラヘラと呼んでいました。雨季に授かった恵みへの感謝と、厳しい乾季への決意を固める意味があると聞きましたが、村人は隣村よりも盛大にやることに関心があり、村々で大勢集まって、競争していろいろな飾りつけをしていました。農業に必要な、相互協力の心と活力を養うことが目的なのかもしれません。

このときはほうぼうの村から招待が来まして、行かないと具合が悪いからこちらはフル回転です。

鎌田 お祭りののはしごですね。

高橋 1カ所であまりたくさんいただくあとが食べられなくなりますから、「ありがとう」といただいたふりをして(笑)。

鎌田 スリランカはいわゆる「小乗仏教」、上座部仏教ですね。イスラム圏の場合は、宗教と農業との関係はどうだったですか。

高橋 アフガニスタンの場合、結婚式とか誕生日などは大々的にやりますが、祭りと言えるかどうか……。

鎌田 農作業と関係したものは、あまりない？

高橋 あまり感じませんでしたが、われわれのプロジェクトで、サツマイモ掘りを始めたんです。当日は、頼んでいないのに朝から大人も子どもも大勢待っていて、わいわいがやがや。掘り終わるとすぐそこで焚火して焼いて食べる。こちらは「種芋だけは残してくれよ」と言って(笑)。これは一種のお祭りでした。そういう場を毎年提供できただけでもよかったと思います。

また毎年11月に収穫祭をやりました。50人か、年によっては100人ほど長老を招待し、試験農場でできたものを調理して、みんなに食べてもらう。その過程で、いま食べている豆はこういう豆で、こういう作り方をするんだというような説明を、アフガンの言葉がしゃべれる橋本君、伊藤君、進藤君らにしてもらう。そして細かい説明は試験農場の担当農家にできるだけやらせる。

というのは、一般農家が長老に説明するのは名誉なことなんです。日本人の説明は少しにしておいて、彼

らにできるだけしゃべらせろ
 と言って。そうしたら自信を
 持つわけです。中には大きな
 ホラを吹く人もいましたが
 (笑)。イスラム圏ですから、
 お酒はなしです。帰りは、試
 験農場でできた種を、来年は
 これをこうつくりなさいと言
 って、お土産にあげる。そん
 なことをやっていました。
 吉川 それはまさに普及のお
 仕事ですね。

高橋 泥棒もけっこういまし
 て、普及の手伝いをしてくれ
 ました。技術だけ盗んでくれ
 るのならうれしいですが、し
 まいには、株ごと引き抜いて
 いくのでね(笑)。ブドウなん
 か、しょっちゅう子どもに盗
 られる。子どもはしょうがな
 いんですが、大人が夜来て株
 ごと引き抜いていくんで、こ
 れはかなわん。でも、そこで怒ったらおしまい。そのう
 ちに広まってしまえば収まると自分をなだめて……。
 助け合い社会であるためか、それほど罪悪感はないよ
 うに感じました。

鎌田 それは、忍耐が必要ですね。

高橋 忍耐ですね。怒らずに待っているのも仕事の内
 です。

吉川 高橋さんが日本に帰ってこられるとき、向こう
 の人たちから、もっと長くいてほしいとか、何か希望
 みたいなのはなかったのですか。

高橋 私はアフガンでは最後のお別れができていない
 んですよ。というのは、私が日本に帰っているときに
 伊藤君の事件が起こって、それからもう行けていない
 んです。

事件が起こって半年後、2009年2月に、試験農場を
 担当してくれていた現地の農家から進藤君のところへ
 電話がかかったんです。「アキルシャとモハマドからこ
 ういう電話が入りました」と、進藤君からメールをもら
 いました。「日本の皆は元気か。ミスター高橋は元気
 か。ミスター伊藤の家族たちは元気か。えん麦の種は
 希望農家に配ってやる。サツマイモはちゃんと貯蔵し
 ておる。農業計画はちゃんとやっている。早く帰って
 こい」という話で、うれしかったですね。

内田 わざわざ国際電話でかけてくださった。

鎌田 それから行かれていないのは心残りですね。

高橋 残念ですが、年齢を考えると、農家が育ってく



収穫祭の会食風景 アフガニスタンで、毎年11月に近隣の長老約100名を招いて収穫祭を開催し、試験農場の
 成績についての報告と意見交換、生産物を利用した料理による会食などを行う。これは村祭りとして定着した。
 収穫祭が終わると、有望な作物・品種の種子をお土産として手渡し、普及の場としても活用してきた

れたことで満足しなければならないと思っています。

日本の農業の未来

鎌田 TPP交渉への参加表明を安倍晋三首相がしまし
 た。そうすると、日本の農家、農業というものがこれ
 から先どうなるのか、いろんな現場で不安の声が上が
 っています。普及員経験者としての高橋さんの立場か
 ら見ると、TPPの問題も含めて、未来の日本の農業を
 どういうふうにお考えでしょうか。

高橋 私はこの問題を云々する能力はありませんが、
 TPPによって日本の農業が崩壊すると農村が崩壊す
 る。農村が崩壊すると、日本人が持っている助け合い
 の心が失われるのではないかと心配しています。日本
 人の精神構造は農村の風土に培われてきたと聞いてい
 ますから……。

鎌田 深刻ですね。TPPに参加せずに、今までのよう
 に日本の農業をもっと育てていくという選択肢はない
 んですか。

高橋 私は深刻に受け止めています。これまで輸入を
 規制していてもかなりの量の米やほかの農産物が入っ
 てきています。ですから、TPPに参加したらどんどん
 入ってくることは間違いない。そのとき、日本の消費
 者がどう選択するか。日本農業の未来は、むしろそこ
 にかかっているんじゃないかと思っています。

吉川 私はいまのような状況を少しでも変えてゆくに

は、普及員さんたちが、国内で新たに農業を始めたいという人たちを支援して、日本の農業者人口を増やしていくような試みがあってもいいんじゃないかと思うんですが、どうなのでしょう。

高橋 これまでの農家戸数を維持することは難しいと思っています。今後はかなり大面積でコストを考えた農業を進めざるを得ないでしょうし、また、いい品質、特色ある作物に特化せざるを得ない場合もあるでしょう。それは農家側の努力だと思いますが、もっと大事なのは、消費者側の意識改革だと、市場で買い物風景を見ながら思っているんです。残念ですが、店頭で産地国を確認している人は少ないですね。そこを抜きにして日本の農業の存立はかなり厳しいと思っています。

鎌田 たしかに、生業としての農業はなかなか成立しがたいという日本の現状があります。しかし、いま農業とか、生命、生物に対する意識は、環境問題も含めて高まってきていて、少なくとも、大学で農学部は人気ですね。農業の研究も実践も、いままで以上に広がってきていると思うんです。農業をやりたいという若者も昔より増えてきている。田圃や畑を借りてやっている若者も少なくない。それだけ危機意識がある。ということは、消費者のほうも、きちんと安全性の高いものを食べて、子どもにもそういうものを食べさせたいという意識は、だいぶ高まってきていると思うんです。

原発の放射能の問題もありますから、これから先も、消費者の意識改革という点では、一生懸命やれば期待できる面があると思います。そして、大規模で、職業として成り立つ農業は狭まってしまうけれども、農業そのものを日本国内でもっと豊かにしていく道はあるんじゃないか。それがないと日本の国全体、生活全体が崩壊していくと思うんです。

高橋 私は、こうしたらいいという知恵はないですが、農業という概念を変えるときが来ているような感じがしています。

吉川 どんなふうに変えるんですか。

高橋 一口で言えば自給自足を発展させることです。私が育ったところは物質的には貧しかったですが、衣食住を工夫し、村の中で助け合い、心の面では豊かだったんです。だから、いったんそこへ回帰し、今度は、ここが一番大事だと思うのですが、生産者と消費者がネットワークを組んで、お互いに知恵と力を出しあって再出発することが必要ではないかと考えています。

鎌田 私も突き詰めたらそれに近いものだと思います。地産地消、自給自足とか、コンパクト・シティみたいなところで、地域で成り立つような経済や生業というものを考える。いまはTPPも含めてグローバル化の流通機構の中で、それを壊されていくような状況

にあります。将来的に自然災害などがもっと増えてくると思っているんです。そうしたときに、自分たちで自分たちの地域をどう維持し守っていくのか。これはやはり生活の基本です。そのとき、農業はもっと自覚的に大事にしないといけないという時代が必ず来ると思います。

吉川 私も地産地消とか自給自足は、小さなまとまりをたくさんつくるという発想で行くのがいいかなと思います。あと、都会育ちの高校生とか大学生が、農業体験に参加する仕組みを自治体レベルで作るといいんじゃないかなと思うんです。自分が食べるものを育てる作業を日常の一部に加えてゆく、ということですが。

地域コーディネーターの役割

高橋 その場合、農業体験のための農地が必要になりますが、農家は土地を手放すことに抵抗感があります。

鎌田 先祖代々伝わっているものですから。

高橋 農地を貸してくれと言えば、持て余してても高く吹っかける。それが災いして、なかなか農地は動かない。

内田 そうですね。新規の人は入りにくい。簡単には貸してもらえないですね。

高橋 また他所から来た人は、やはり他所者として扱う。地域によって程度の差はありますが。

内田 だから、こっちにやってみたいと思う人がいて、こっちに余っている土地があるけれども、簡単にはいかない。

高橋 そうですね。

鎌田 僕はこれから先、地域のいろんな問題をうまく解決していくコーディネーターの役割をする人物が必要になってくると思います。農業もその1つですが、その要望、ニーズ、たとえば農地を貸してほしいという人と、農家の人をつないで成立させていく。そして、両方がよい状態を見いだしていくようになればいいと思います。

内田 それはまさに普及員さんのお仕事ですね。

高橋 むかし普及員は、そういう役割も持っていたんですが。

内田 農業に限らず、生活改良の普及員さんも、そういう役割を果たしておられる。

高橋 それがいつの間にか、技術屋、事務屋の傾向が強まってきたと聞きました。

鎌田 そうですね。だから、今までの普及員という枠では収まらないような事態が、社会全体で生まれてきていると思います。人間関係そのものをもう1回つなぎ直してくれるようなコーディネーターが求められている。

高橋 鎌田先生、そのお話、私はたいへん心強いです。
 鎌田 僕は本当に社会コーディネーターが必要だと思うんです。そういう役割を果たす人が出てこないとい日本は崩壊していく。

高橋 同感です。

鎌田 でも、何とかしたいという気持ちはみんなあるんですね。だから、何とかしたいという気持ちそのものをつないでいく「つなぎ屋」が、これから大事になると思います。そのためには、知恵と経験と忍耐力を兼ね備えた高橋さんのような方が世の中で大いに活躍してくれたらいいと思います。

内田 本当にそうですね。高橋さんは『技術と普及』という雑誌に「おじいさん普及員の遺言」というタイトルでずっと連載しておられました。若い普及員の方に、まさに知恵と経験を伝える文章で、味わい深く、ファンがたくさんいると聞いています。

「共に生き、共に喜びを得るために」

内田 若い普及員さんだけでなく、いまの若い人の中には、いろんな人とつながって、自分を生かしていきたいと思っている人はいるんですね。その一方で、そういう人たちの気持ちが、いまいち生かしきれないような社会の仕組みもある。たとえば、普及員さんはすぐ人が減っていて新規採用もなかなかないとか、そのアンバランスさを何とかできないのかなといつも思っています。

高橋 私もそう思いますが、こんな年であり出しゃばると、かえって若い人の反発を招きます。だから、中年の普及員が育つことを切に願っています。

吉川 20代の人たちは夢も持ちやすいのですが、40～50代、高橋さんの次の世代の人たちは、迷ったり次の道を探しあぐねたりしているんじゃないかと思うんです。

高橋 そうみたいです。

鎌田 メタレベルで、世の中を支援したり、サポートとかサジェスションとか、いろんなヒントを与えて活性化させていく人を「メンター」というんですね。それは昔でいえば「長老」の役割です。少子高齢化していくので、そういう人たちのサイクルをうまくつなぎ合わさないと、社会全体が回っていかない。

高橋 アフガンでいっしょに仕事をした進藤陽一郎君が、素晴らしい言葉を送ってくれました。「教えに行くのではなく、人助けに行くのではなく、共に生き、共に喜びを得るために行く」という言葉ですが、この言葉は、鎌田先生のお考えを実現するうえで役立つように思うのですが……。

鎌田 まさにそうですね。



収穫祭のセレモニーに立つ中村哲医師(右)と進藤ワーカー(中央)
 中村医師は、1984年にパキスタンで医療活動を開始し、現在アフガニスタン東部を中心に、灌漑・農業・医療の活動を展開している

高橋 アフガンだけでなく、日本の国内でもこれであるべきだと思います。

鎌田 それこそ普遍的な精神ですね。

高橋 「負うた子に教えられ」ではありませんが、中年の世代が育ちつつあることに希望を感じています。

吉川 いまおいくつぐらいの方ですか。

高橋 35歳くらいだと思います。

内田 若いですね。

鎌田 そういう方々が活躍できる時代が来ることがこれからの希望のひとつです。ぜひ、高橋さんのお力ももっと発揮していただいて、日本の農業や社会全体を、もう1回立て直していく、結びなおしていくようなことをしていただきたい。そのためにセンターも何か役割を果たせればいいなと思っています。

高橋 こちらこそ、お世話になります。こころの未来研究センターが、心と心をつなぎ、社会に温かさや新たなエネルギーをもたらす拠点になることを期待しています。よろしくお願いします。

吉川・鎌田・内田 本日はいいお話をありがとうございました。

(2013年3月29日、こころの未来研究センターにて)

